2019 年 11 月 24 日（日）「栄光と謙卑」

ピリピ 2:6-8

6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、 7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、 8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

【序論】

今年のアドベントは来主日（12/1）から始まりますが、一週先立ってアドベントの説教をさせていただきます。今日は 11 月最終主日につきテーマ説教をさせていただきますので、それに合わせてイエス・キリストが世に来られたことの意味を考えてみましょう。

今日選んだピリピ 2:6-8 は、有名な「キリスト賛歌」です。おそらく、紀元 1 世紀のキリスト教会内で生み出され、信仰告白として唱えられていた、あるいは賛美として歌われていた詩であると思われます。本来、この賛歌は 11 節までで一まとめとなるのですが、今日は前半部のみを扱うことにしました。前半部分はひたすらイエス様が元々どういうお方であったのか（→神ご自身であった）、その方がどのようになられたのか（→人間となった）に焦点が当てられています。後半は、どこまでもへりくだられた神の子に与えられるこの上ない栄光について語られている。今日は前半部分から、イエス様が世に来られる前に天において（御父と御子との間で）交わされたであろう会話をイメージしてみたいと思います。

【本論】

<u>本論１．神と等しいイエス</u>

キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、（2:6）

私たちの中には、既にイエス様の人間としてのイメージがあると思います。そのイメージは様々な聖画や子ども向けの絵画によってつくられてきたものではないでしょうか。髪が長く、白い衣を身にまとっておられるイエス様。あるいは、十字架上のイエス様のイメージが強く焼き付いている方もいらっしゃるでしょう。しかしながら、私たちは実際の「人間としてのイエス様」を見たことはなく、2000 年前に本当に今絵画で見るよ

うな姿であったのかどうかも分かりません。私たちは今一度、絵画上のイエス様のイメージを取り払い、この方が元々人間の肉体をもつことのなかった霊的存在であることを認識したいのです。

先ほどお読みした６節には「**神の御姿**」という表現が出てきます。「姿」（μορφή）という言葉は「かたち」（form）とも訳すことができますので、口語訳のように「神のかたち」としてもよい。「かたち」とは、この方がどういう存在であるかを説明する言葉であり、「神と等しい存在」「神ご自身」「神の身分」であると言っていることになる。イエスは神であった。天地万物の創造主、栄光に満ちた神であられた。

「三位一体」という専門用語があります。一人の神の中に三つの人格があり、完全な一致をもって相互に愛し合っていることを表しますが、私たちは想像するしかできません。その中で、少なくともこのようなやり取りがあったことは考えられるでしょう。

「さあ、世界を創造しよう。その世界の無限大の大きさ、美しさ、完全なる秩序によって、神の栄光を表わそう。それを見るすべてのものが神を喜び讃えるように。」

そして、父・子・聖霊による綿密な計画の下、宇宙が造られ、最終的に地球上に知的生命体である人間が置かれました。神は人間を特別な存在として造ってくださった。

> **神は仰せられた。「さあ人を造ろう。<u>われわれのかたち</u>として、<u>われわれに似せて</u>。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」神は人を<u>ご自身のかたち</u>として創造された。<u>神のかたち</u>として彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。**（創世記1:26-27）

ここに出てくる「**神のかたち**」という表現は、今日の「**神の御姿**」と同義と考えられます。つまり、人間には元来神の栄光があったのであり、人間を見ると神が見えた。神の素晴らしさが人間に満ち溢れ、全地を治める者としての威厳を漂わせていた。動物も、植物も、神の栄光を湛えた人間に管理されることによって、安心して生存できたのです。人間とはそれほど尊く、輝かしく、非の打ち所のない存在であった。

しかし、人間は神の栄光を失ってしまいました。人は神と等しくなろうとし、自分の思いのままに世を治めようとした。それが創世記３章に描かれた出来事の意味です。人間は神から離れ、神の栄光を失い、「偽りの管理者」となって「神のもの」を破壊する存在となりました。現在に至るまで、環境汚染、病気、差別や貧困によって世界が苦しむのは、人間の罪によるのではありませんか。

このような世界をご覧になった神の中で交わされた会話を想像してみましょう。

「この悪しき人間世界を見たか。我々が造ったすべてのものが壊されている。人の心が病んでいる。この世界を救わなくてはならない。人間を罪から贖わなくてはならない。イエスよ、人間の一人となり、人間を代表し、私（父）の怒りを引き受けてくれないか。」

本論２．人となり、しもべとなったイエス

６節の後半部分に「**神のあり方を捨てられないとは考えず**」とあります。「**神のあり方**」とは、直訳すると「神と等しくあること」で、神ご自身がもっておられる地位や特権、栄光や名誉のことを指すでしょう。イエス様は永遠に神として変わらず存在し続けることができたのですが、その特権を手放す決意をなさったのです。「**捨てられないとは考えず**」（新共同訳：「固執しようとは思わず」）とは、イエス様が神と等しい存在であること、本来もっておられる栄光を主張しないことを喜んで受け入れたということです。

人間は自分のもつ栄光にしがみつく傾向があるでしょう。腕力、経済力、経歴、学歴、社会的地位、名誉など、人生に付随するあらゆるものが私たちの栄光となるかもしれません。人がそういうものにしがみつく姿は惨めで愚かに見えるのですが、自分の中にもどこか当てはまる部分があるのではないか。

少々変わった言い方になりますが、イエス様は神であるがゆえに神の栄光を完全に隠すことがおできになりました。人間には誰かに「認められたい」という認証欲求がありますが、イエス様にはそういった欲求が存在しなかったのです（愛で満ちているから、人に認められる必要がなかった）。とはいえ、イエス様は神であることを放棄したわけではありません。依然として神であられながら、その本来的栄光をしまいこんだのです。

> **今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。**（ヨハネ 17:5）

イエス様は地上で人間として生活された間、絶妙なバランスで生きておられました。神であるがゆえに、父なる神様の御心をわきまえ、この世で起きているすべてのことを知り、隠れた人の心を見抜き、未来を見据え、どんな御業をも行ない得ました。神であることを、「支配」を目的としては主張せず、それとなく分かるような語り方・行動の仕方で、分かる人には分かるように伝え続けました。しかし、知識において全知であることが可能でありながら、知らなくてもよいことは敢えて知ろうとせず、父なる神様の御手に委ねました。そして、神の力を用いる場合にも、助けを必要としている人がそこにいる状況だけを注意深く選び取り、それを自分の栄光や自分の必要のために使うよう促されたときには、決してそれに応じることはありませんでした。

> **ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、**（2:7）

「無にする」とは「自分自身を空っぽにする」こと。ご自身が本来もっておられるはずの栄光を徹底して隠し続けるということです。普通の人間はその反対をしてしまうでしょう。「能ある鷹は爪を隠す」という諺には確かに真理がありますが、人間はやがて「爪」

が顕になり、「実はこういう者だったんだ」と公に知らしめられることを今か今かと待っているものです（水戸黄門の印籠は象徴的）。しかし、イエス様の内では、そういう願望はゼロであり、ご自身の知識や能力によって人を支配したり、褒められたりすることを、最後まで望み給わなかったのです。

そればかりか、「**仕える者の姿をとり**」とあるように、弟子たちの師でありながら、自らしもべとなって彼らの足を洗い、多くの人々に時間も体力もささげて癒しの御業を行ない、御言葉で養われました。「**人間と同じようになられた**」「**人としての性質をもって現れ**」は、ほぼ同じ意味でしょう。永遠の神が時間の中に入ってこられ、無限の神が有限なる人間となり、創造主が被造物となり、絶対者が相対的な世界で生きられたのです。

本論３．十字架で死んだイエス

以上のことから、イエス様がどこまでも神としての栄光を放棄されたことがご理解いただけたのではないでしょうか。しかし、ストーリーはこれで終わりではなかった。主イエスは何と、人間としての尊厳のすべてを放棄する仕方で死なれたのです。

自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。（2:8）

「**自分を卑しくし**」とは、イザヤ 53 章に登場する「苦難のしもべ」の姿そのものになられたことを言い表しているでしょう。原文で使われている言葉と、イザヤ 53:8 のギリシャ語訳の言葉との間には著しい一致がある。

イエス様の謙卑は、「神が人として死ぬ」というだけでも十分であったかもしれません。しかし、主は十字架刑という「人間に与え得る刑罰の中でも最も尊厳を傷つける処刑法」で殺されたのです。紀元前 1 世紀の哲学者キケロは、十字架刑のおぞましさを「最も残酷で忌まわしい極刑」と説明しています。十字架刑は、ローマ帝国に逆らった者を見せしめとするため、人間に極限の苦しみを与え、長時間かけて命を奪う、極刑中の極刑です。受刑者は全裸にされ、両手両足を太い釘で木に打ち付けられ、体がずり落ちるよう斜めに設置された板の上に腰掛けさせられる。自分の体重で肩は脱臼し、呼吸困難のために懸命に体を持ち上げるとまたずり落ちるということを延々と繰り返す。全身の機能は麻痺し、垂れ流し状態になり、猛禽に突つかれ、足は折られる。このような死に方をした人は、埋葬されることもなく、投げ捨てられ、野ざらしにされ、野の獣に喰われるままにされるのです。まさに、徹底したこの世からの廃絶。申命記 21:23 で言われているとおり、「**木につるされた者は、神にのろわれた者**」となり、イスラエル共同体から除外され、神の契約から除名されました。

イエス様は、そのような地上の生涯を遂げられたのですが、それは何のためであった

か。まことに「**私たちの病を負い、私たちの痛みを担う**」ためでありました。

> **彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。**（イザヤ53:2-4a）

イエス様がこの世に派遣される前、父なる神様とイエス様との間ではどこまでのやり取りがあったのか。このような最期を遂げるということのすべてを父なる神様は計画として話されたのではないでしょうか。

「イエスよ、お前にしか人類を救うことはできないのだ。お前が完全な犠牲となって、多くの人の罪を負い、死んでわたしの燃える怒りをなだめなくては、誰もわたしの許に来ることはできない。愛するイエスよ。わたしにとってもこれは辛い計画なのだ。しかし、分かってくれるな。わたしがお前を犠牲にするほどまで、人類を愛していることを。」

「父よ。わたしはあなたの御旨に従います。あなたの御心は常に最善であり、実現されなくてはなりません。わたしは地に参ります。わたしを派遣してください。どんなに辛いことがあっても、わたしは最後まであなたの御旨に従い抜きます。」

【結論】

今日はアドベントに先立ち、世に派遣される前の天での会話をイメージしてみました。イエス様はどれほどの栄光を放棄して世に来られ、十字架への道を歩み抜かれたか。これからクリスマスに向かっていく日々、大きな決意をもって世に来てくださったイエス様を、心から「私の救い主」としてお迎えする備えをしたいと思います。

【祈り】

栄光の神よ。栄光を失った私たち人間にとって、その虚像さえも捨てることは困難なことです。ところが、主イエスは真の栄光、神の栄光をまことに手放し、栄光を失った者の一人のようになられました。そればかりか、その人間の中でも最も低められた者として死に、契約共同体からも追放されました。主イエスは私たちの病を負い、私たちの痛みを担ってくださったのです。それは、私たちの神との関係を取り戻させるためでした。クリスマスを前に、主イエスのこの決意を心に留めます。ほかならぬ私のために、主が世に来られたことを信じます。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人を「神のかたち」として創造し、ご自身の栄光を纏わせ給うた、父なる神の愛。
堕落によって栄光を失った人間世界に降り、神の怒りを一身に引き受けて死に給うた、主イエス・キリストの恵み。
信じる者に神との新しい関係を構築させ、真の慰めを与え給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。